

題名:無知公理-定義存在学-
副題:空間選択によるヒエラルキー階層
著者:[吉見真一](Shinichi Yoshimi)
場所:[日本](沖縄県)
Email: akbfp443@me.com
ORCID: 0009-0008-8121-8947
日付: 2026年1月17日

=====

【本論文における記述ルール】

1. 括弧と強調

- ・ **【 】** : 章題、主題、大分類
- ・ **[]** : 数式番号、引用番号、下位分類
- ・ **()** : 補足説明、翻訳、略語定義、数式内の演算順序
- ・ **《 》** : 本論文で独自に定義・提唱する重要概念
- ・ **{ }** : 概念のID番号（文脈によらず同一の定義であることを示す固定ID）

=====

【ID記法・概念定義一覧】

本論文は[定義存在学 数学文法認知哲学と数学的理想主義の記法定義]
(<https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174>)を基礎定義として用い、本論文独自の定義と統合して管理する。

[本論文独自定義]

・ **《無知公理》{001}**
存在は、認識により記述を意識している。意識を主体とする状態を作っている現象。解を1つ選ぶことで、選ばれない他を選んでいる作用。

・ **《反証》{006}**
問題が成立していない。問題の条件が成立していない。問題の提示ができていない。などという反証があるが問題を固定すると答えとなってしまう。

・ **《ヒエラルキー階層》{007}**
無知公理の主体が固有公理となった場合現象化する構造。

・ **《固有公理》{008}**
《固有》{018}の**《公理》{017}**

[定義存在学(<https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174>)より引用・継承される定義]

・ **《意識》{002}**
基準の定義。

・ **《認識》{003}**
結果の定義。

・ **《抽象》{004}**
認識の集合的感覚。

・ **《概念》{005}**
意識の集合。

・ **《存在》{009}**
定義された物。

・ **《主体》{010}**
基準。

・ **《状態》{011}**
存在が認識し記述できる集合体系。

・《《的》》{012} (〇〇的)
基準の相似。

・《《記述》》{013}
基準からの力学による記号。

・《《定義》》{014}
JIKANの差。

・《《解》》{015}
記号と同一。

・《《現象》》{016}
主観的な状態と客観的な状態の同一性。

・《《公理》》{017}
基準。

・《《固有》》{018}
存在の集合体系・存在が主体として客観的に記述する力学を有する状態。

[定義存在学(<https://doi.org/10.5281/zenodo.17785174>)より引用・継承される定義の記法を説明するための抜粋]

- ・記号：存在の構造化。(物質と定義することができる)
- ・排除：同一性を定義するための結果
- ・集合：定義が基準になる。
- ・相似：集合の定義力学。
- ・力学：定義による密度差。
- ・主観：存在が基準となる。
- ・客観：定義が基準となる。
- ・〇〇体系：集合の状態。
- ・密度：定義と結果の力学の記述。
- ・構造：計算を解とする固有体系
- ・階層：計算を排除する固有体系

=====

【《《無知公理》》{001}】

《《存在》》{009}は、《《認識》》{003}により《《記述》》{013}を《《意識》》{002}している。
《《意識》》{002}を《《主体》》{010}とする《《状態》》{011}を作っている《《現象》》{016}。

《《存在》》{009}が、《《認識》》{003}を《《主体》》{010}として《《記述》》{013}する《《定義》》{014}は《《抽象》》{004}となる。
《《存在》》{009}が、《《意識》》{002}を《《主体》》{010}として《《記述》》{013}する《《定義》》{014}は《《概念》》{005}となる。

《《抽象》》{004}《《的》》{012}記号を《《解》》{015}とする時、《《概念》》{005}《《的》》{012}《《解》》{015}を記号として《《定義》》{014}していない《《状態》》{011}。

[例. 1]

問題

$A \cdot B \cdot C$ の中から1つ選んでください。

答え

A

[無知公理]

《《解》》{015}を1つ選ぶことで、選ばれない2つを選んでいる。

[例. 2]

「D0」の意味を答えなさい。

AIでの回答

動詞（一般動詞）：する／行う

助動詞（疑問・否定・強調）：疑問文を作る、否定文を作る、強調

代動詞（同じ動詞句の繰り返し回避）：そうする／同じことをする

名詞（口語・英英圏の用法）：やるべきこと／仕事、パーティ、ド（音名）

[無知公理]

「D0」に対して「Do」・「do」などを選択する。

[例. 3]

1+1を答えなさい

答え

2

[無知公理]

数学の四則演算をする。

「1+1=」では答えは2だが、「1+1を答えなさい」は質問として成立していない。

【《反証》{006}】

問題が成立していない。問題の条件が成立していない。

問題の提示ができていない。などという《反証》{006}があるが、問題を固定すると答えとなってしまう。

[反証例. 4]

問題

A・B・Cの中から1つ選んでください。

ただし、BとCは必ず選ばないこと

答え

A

つまり、《無知公理》{001}を含まないと《解》{015}は導き出せない。

【《ヒエラルキー階層》{007}】

《解》{015}を《記述》{013}する場合、《主体》{010}を《無知公理》{001}とした場合

[1] 《存在》{009}は、《認識》{003}により《記述》{013}を《意識》{002}している。《意識》{002}を《主体》{010}とする《状態》{011}を作っている《現象》{016}。

[2] 《存在》{009}が、《認識》{003}を《主体》{010}として《記述》{013}する《定義》{014}は《抽象》{004}となる。《存在》{009}が、《意識》{002}を《主体》{010}として《記述》{013}する《定義》{014}は《概念》{005}となる。

[3] 《抽象》{004}《的》{012}記号を《解》{015}とする時、《概念》{005}《的》{012}《解》{015}を記号として《定義》{014}していない《状態》{011}。

[4] 《存在》{009}が、《無知公理》{001}を《主体》{010}として《記述》{013}する《定義》{014}は《概念》{005}となる。

[5] 《無知公理》{001}の《主体》{010}が《固有公理》{008}となった場合、《ヒエラルキー階層》{007}は現象化する。

【結論】

問題を作る際に、《無知公理》{001}を作ってはいけないということではない。

《ヒエラルキー階層》{007}を作ってはいけないということではない。

《記述》{013}や《定義》{014}において『問題と《解》{015}』は、《無知公理》{001}を《記述》{013}することで『問題と《解》{015}』を計算し再現することができる。